

戦中・戦後の文部官僚、 釘本久春のライフストーリー —他者の記憶からその人生を辿る試み—

河 路 由 佳

1. はじめに

釘本久春（1908-1968）は、文部官僚として戦争中から占領期を経て戦後の復興期に至る激動の時代の日本語普及、国語改革に関する政策の実行に取り組んだ人物である。釘本は、戦争中は「東亜の共通語」としての外地での日本語普及やその教科書編纂に取り組み、戦後は一連の国語改革の実行を担い、国語審議会、文部省国語科、そして国立国語研究所の設置を実現した。また、戦後の日本語教育復興に伴う日本語教育学会の創設にも中心的役割を果たし、東京外国語大学に留学生課程ができるとその担当者になった。

一方、釘本久春は一高時代には小説を書き、東京帝国大学では国文学を学んだ。一高時代の友人に中島敦がいる。中島の死後、その作品を世に出すのに尽力した。釘本の研究課題は中世歌論で、1944年に古今書院から『中世歌論の性格』を刊行し、生涯を通して古典文学研究への思いを温め続けた。

敗戦による政治・文化の大きな変化にも関わらず、釘本は戦前からの人間関係を保ち、常にエネルギーで前向きな印象を周囲に与えた。1968年5月11日に釘本が亡くなると、彼が中心的役割を担っていた「国語を愛する会」は、定期刊行物『日本語』の同年8・9月合併号を、「釘本久春追悼号」とし、日本語教育学会では、1968年10月の『日本語教育』12号に「釘本久春氏追悼」特集を組んだ。公私にわたって釘本と親交のあった255名が寄せた追悼文は、釘本が周囲に与えた印象の強さを物語っている。

戦中戦後の激動を超えて、釘本の仕事への熱意は変わらないように見える。その情熱を支えたものは何だったのだろうか。それを知るためには、釘本の人生を理解する必要があると思われる。

そこで、本稿では、今後の釘本研究の基礎として釘本久春のライフストーリーを、年譜と周囲の人々の記憶から描き出すことを試みる。記憶は必ずしも客観的事実であるとは限らないし、釘本に批判的だった人は証言者に含まれないであろうことに留意する必要があるが、釘本の仕事を理解するには、人々に与えた積極的な印象に重点をおくことにも一定の意味があると考えられる。

2. 釘本久春研究の現在

当時の日本語教育や国語改革、また、中島敦に関する文献に、釘本久春の名がしばしば現われ、釘本の働きがあったことは知られているが、釘本を中心に論じた研究論文は多いとは言えない。

山口正（1986）は、釘本の世話で戦争中に南方に赴いた経験から、敬愛を込めて釘本の日本語教育上の貢献を評価している。桜井（1992）は釘本を「個人的には魅力ある人間だったようであり、それゆえに果たしえた組織者としての功績は否定できない」としながらも、中島敦に南洋群島での教科書編集の仕事を斡旋した釘本が「侵略的日本語教育のイデオログ」であったことを批判している。駒井（2000）は、日本語教育振興会の機関誌『日本語』に寄せた釘本の1941年から1944年に至る言説を辿り、初期には教えるべきは現代日本の「生活語」であるとして精神性には言及していないのが、最後には「八紘一宇の精神を身につけしめること」が日本語教育の目的であると説くようになる変遷の過程を明らかにした上で、「中世歌論の研究を愛する青年が、戦争のために(p.72) 官僚となり、流暢なことばで扇動的な文章を綴ったのは、「自らの信念としての言葉ではなく、仕事として立場上そう言わざるをえなかったのだろう」と理解を示している。嶋津（2017）は、『日本語教育』12号の釘本への追悼文等をも参考にして、島内（2009）が中島敦の「山月記」の主人公である虎になった詩人、李徽のモデルを中島自身、旧友で「官僚としての地位を固めた」袁儻のモデルを釘本であると推定しているのに異を唱え、釘本が国文学研究を志しながらもこれを本務とすることはできなかったことなどから、釘本もまた李徽であったと主張する。ほかに、安田（2010）は、連合国軍総司令部（GHQ/SCAP）の記録文書に残された教育情報局（CIE）のアブラハム・マイヤ・ハ

ルパンと釘本のやりとりから、国立国語研究所の設置や国語審議会の再編には、GHQを説得し承認を得ることが必要であったことを明らかにし、その交渉を釘本が時に譲歩しながら彼らを説得して進めていた様子を描き出している。

戦中戦後の日本語・国語政策の転換点に大きな役割を果たした文部官僚としての釘本の働きについて、また、私人としても「国語を愛する会」等の活動を精力的に展開した釘本久春という人物について、研究の余地は多いと言える。

3. ライフストーリー研究の目的

戦争中から戦後にかけての文化的社会的変動を超えて、たゆむことなく仕事に情熱を傾け続けた釘本の姿は強い印象を残す。種々の矛盾を、一人の人間がいかにか統合し、いかにして変わらぬ熱量で仕事に打ち込むことを可能にしたのか。この問いへの考究は、戦前戦中戦後の日本語教育、国語政策の本質を問うことにもつながるだろう。本稿で釘本久春のライフストーリーを描き出そうとする第一の目的はここにある。

また、戦争中や占領下の言説は、時局の制約を免れない。その制約を、同じ人物の職務外の言動や他者に与えた印象から炙り出し、困難の多い時期の言説を読み解く手がかりを得たい。

同時に、戦後の国語改革、国語政策（文部省国語課、国語審議会、国立国語研究所の設置等）、また日本語教育（日本語教育学会の創設等）の推進に果たした釘本の役割、公私にわたるその努力や働きが、改めて浮き彫りになる可能性がある。こうして、釘本久春の人生を考察することによって、同時代の知識人の言説や行動への戦争の影響を読み解く一つのモデルを得ることも期待される。

4. 釘本久春の記憶を語る資料

本稿で主として用いるのは、釘本の没後間もなく計画され、原稿が集められた「国語を愛する会」による1968年8・9月合併号『日本語』の「釘本久春追悼号」である。A6判116ページの冊子の全ページにわたって248名が追悼文を寄せている。同年10月の日本語教育学会の刊行物『日本語教育』12号では初めの22ページを「釘本久春氏追悼」特集とし、16名の追悼文を掲載している。両

方に重なる書き手が9名いるので、都合255名が、公私にわたるそれぞれの釘本の思い出を綴っていることになる。そのほか、河路(2009A)(2009B)は、1974年に東京外国語大学外国語学部附属日本語学校の校長室で行われた高橋一夫・鈴木忍の思い出を語る座談会のテープを文字に起こしたものだが、ここにも釘本久春への言及がある。河路(2004)所収の松村明、金田一春彦へのインタビューで両氏が釘本に言及、長沼直兄、鈴木忍についての研究(河路編2009C、河路2009D)にも名前が登場する。また、2017年10月8日には釘本久春氏長女、山田しのぶ氏にお話をうかがい⁽¹⁾、釘本とハワイ大学で任期の重なった齊藤修一氏には2018年3月3日に河路が電話インタビューを行った。釘本による著作や釘本に関する論文も適宜参照する。なお、引用に当たって、縦書きの原文を横書きにするに際し、読みやすさのため適宜漢数字を算用数字に改めて示す。また敬称は省略させていただく。

5. 釘本久春のライフストーリー

ここでは、釘本の60年の生涯を11に分けて、その間の年譜事項を挙げ、釘本に関する他者の記憶から当時の釘本像を描く。なお、他者の記憶は追悼文などから原文を生かしつつ適宜要約して鍵かっこに入れて示し、文中に中略がある場合は〔…〕で示す。煩雑さを避けるため書き手についての説明は最小限にとどめる。『日本語』の追悼号は「追」、『日本語教育』12号の追悼特集は「12号」、河路(2009A)(2009B)は「74年テープ」、インタビューでの談話は「談」として示し、その他は通常の引用の表記に従う。

5-1. 幼少時(1908-1920 / 0-11歳)

1908年4月28日 東京都文京区にて誕生。父：重治、母：百代。

1910年6月14日 母、百代、病死。

1915年4月 群馬県立男子師範学校附属小学校入学。

1920年3月 同小学校を成績優秀につき5年で修了。

生母は久春2歳のときにチフスで亡くなった。父は後妻を迎え、久春は前橋にある継母の実家で、その両親である音楽家の内田糸太郎夫妻に養育された。

柴田農武夫は「感じ易い感激家の釘さんだったが、少年期を通じて、幼くして生母をなくした傷心の影をほとんど認め得なかったことは、立派な家庭環境によると思う（追）」と述べるが、淋しさは釘本につきまとったようである。1963年ごろ手伝いとして釘本家に入った磯野和子は「だんなさまは、小さい時お母さんに死に別れたと、奥様から聞きました。だんなさまがかわいそうでなりませんでした（追）」と書いている。

柴田によると、当時の釘本は、「平均より背の小さい、伶俐な坊や」で、国語、作文に秀で、「作文の時間はいつも釘さんの模範作文が読まれ」た。「『それがすべてだ。』と結ぶのが」釘本少年の得意であった。「その頃釘さんの発案で鉛筆書きの回覧雑誌をつくり、二、三号は出したと思う」という。釘本は成績優秀のため通常は6年間の小学校を5年で終えて中学に進学した。柴田は「内田家は一家を挙げて熱心なクリスチャンで、私の家も同じだったので、釘さんとは毎日学校で顔を合わせる以外に、日曜日教会で一緒だった。（追）」と語っている。前橋はキリスト教が盛んで、19世紀末に松宮弥平が宣教師のための日本語教育を始めた地でもある。

5-2. 中学・高校時代（1920-1929／12-20歳）

1920年 4月	群馬県立前橋中学校入学
1925年 3月	同上 卒業
1926年 4月	第一高等学校文科乙類入学
1929年 3月	同上 卒業

前橋中学でも、釘本の文芸への志向は明らかであった。鷲田健二は、「『ヒサ坊』と呼ばれる小柄で目の大きい」釘本が、「特に作文が得意で、教師から指名されて自分の作文をよどみなく読み上げた（追）」姿を思い出している。柴田農武夫は思い出の続きとして「中学生のクリスチャンの会、暁明会のメンバーで毎週一回放課後宣教師の家で英語の歌を習い、夏休みには、赤城山で十日間のキャンプをするのが恒例で（追）」、常に共に行動していた釘本の将来を「すぐれた詩人か、作家になるだろう」と思っていたと語る。

中学の文芸誌については、山田しのぶが、ある展覧会で、当時の高崎中学と

前橋中学の文芸誌が展示してあるのを見たら、釘本はその両方に作品を寄せていたのだと語った（談）。両校はいわゆるライバル同士であったが、釘本は積極的に交流していたものと思われる。

一高では校内の文芸誌に小説を書いたりした。このときの仲間に中島敦がいる。吾孫子豊は釘本について「非常な勉強家努力家」で、「強い自信をもって独自の道を歩んでいた」が、「相当な説教好きで多少押しつけがましいところもあった（追）」と書き、勝田守一は、「かれは作家志望の夢を抱いていたにちがいない。プロレタリア文学の最盛期で、周囲に左翼的な傾向が強まっていたが、かれは芸術至上主義者であったようだ。リルケや萩原朔太郎に傾倒し、上田敏の訳詩集の豪華版を所有していた。（追）」と語っている。

5-3. 大学時代（1929-1932／21-23歳）

1929年4月 東京帝国大学文学部国文学科入学

1932年3月 同上 卒業

東京帝国大学国文学科に進学した釘本は久松潜一の下で古典文学を学んだ。久松は、釘本について「明敏な頭脳と文芸に対する鋭い感受性とを有して」おり、「藤原俊成の文芸に関するすぐれた論文」を書いて卒業した後も中世和歌や歌論の研究に力を注いだと述べる。釘本の鑑賞の冴えは、釘本の「詩人的性格と物に対して深く感動する純粋な精神」に基づくもので、更なる発展が期待され、釘本自身も、研究の大成を「最後の瞬間まで心に念願して」いたのではないかとの久松の問いかけには真に迫るものがある。

この時期、釘本は吉田精一らと『しむぼしおん』という文芸誌の同人として、小説を書いていた。吉田精一は「欠席が多く、お互いに勤勉な学生とはいえなかった。（追）」と意外な証言をしている。『しむぼしおん』については沢田敏行が中学生のころ、釘本の「残った朝」という「新鮮可憐な小品」を読んだが、「戦後、偶然、文部省の国語課長である釘本さんに会ったら、文学青年の面影は微塵もなかった。（追）」と述べているのも印象的である。

釘本は夏には、軽井沢の寺に居留して勉強し、仲間を呼んだりしていた。草

島時介は、「毎年の軽井沢避暑は楽しかった。僕は軽井沢旧道の神宮寺というお寺の二十四畳の部屋をかりうけ、二人で自炊した。外国の紳士淑女が、仏様を拜もうと本堂に上って来ると、釘本氏は潇洒ないでたちで飛出し、(英語で)解説する。外人夫婦が行ってしまうと、二人で廊下の大掃除をした」という。釘本は「古今集、新古今集」を勉強していたが、ときどき学友や外国人の友人も連れてきてすきやきパーティーをした。「日本語でやればよいのに、釘本君は、英語で一席『諸君』とぶっばなした。(追)」という。釘本が英語に堪能だったことは、多くの人が印象に残している。中平解は、1931年の夏、軽井沢で初めて釘本に会った。「釘本君は寺に泊まって卒業論文の準備をして」おり、「短いズボンに膝までくる靴下をはいて颯爽としていた。(追)」という。釘本は英国大使館の語学将校に日本語を教えるアルバイトをしており、同じ仕事を中島敦にも斡旋した(釘本1963)。ここに、釘本と日本語教育との接点を確認できる。

金澤謹は、「つきあいのよかった彼が卒業論文で忙しいというので、問い詰めてみると二宮文代さんというフィアンセが出来ていた(追)」と述べ、釘本の結婚に触れている。卒業の3月に、釘本は長男を得て、若き父親になった。

5-4. 浅野中学・中央大学時代(1932-1937/24-29歳)

1932年4月 私立浅野綜合中学校教諭嘱託。

1936年4月 中央大学予科講師嘱託

大学を卒業して浅野中学の教師をしていた当時、渡辺保は、釘本と一緒に「ストーリーを作って16ミリ映画を撮ったり野球のチームを集めて相手を探して試合したことがあった(追)」と語っている。また、新婚の釘本が奥沢に居を定めたころ、中平解は「よく釘本君が訪ねてきて、熱心に話し合った」という。それも「朝から出かけて、昼飯だけ食べに帰って、またやってきて話すものだから、奥さんが怒っ(追)」たほどであったという。

当時の教え子、石川百一の思い出は青年教師、釘本の姿を彷彿とさせる。1933年2月のこと、「先生が教室に見えると同時に黒板に書かれて小生に音読を指名された。『今日ひと日人をうらまずあらがはずもだしてあらな埋火をみる』腕力を自負していた当時中学3年生の小生は、此の時以来行動をつつしむ

ようになった。(追)」というのである。

西尾実は、1935年ごろの思い出として、釘本が久松の紹介状を持って訪ねてきて、「文学研究について深く肝胆相照して話し合った(追)」と書いている。このあと釘本は職場を中央大学に移した。

5-5. 応召、出征から陸軍士官学校時代(1937-1939/29-31歳)

1937年 9月 近衛歩兵二連隊に応召入営。中国に出征。

1938年 7月 病気のため帰還

1939年 2月 応召解除。4月 中央大学予科教授。

同年 7月 陸軍予科士官学校教授嘱託(同年11月、嘱託解除)

金澤謹によると、釘本は「明朝入隊すると決まった前の晩」、中目黒の自宅に金澤ら友人を招いた。そして「赤紙を受け取ってから現在までの心境を縷々話すからよく聞いてほしい」と言った。話を聞いた金澤は釘本が「立派な文学者であったことに感動させられた(12号)」と書いている。西尾実は釘本を「九段の近衛連帯の営庭」まで送りにいった。渡辺輝一は、「戦争中釘本氏は応召、輜重輸卒として中部中国戦線にいた。さいわい除隊、帰国した。そのころ『今度またひっぱりられたら自殺する』と言っていた(追)」と書き、金田一春彦も釘本は「(『戦争と日本語』の議論は)言わなくてもいけないと思って言ったんだと思いますよ。兵隊へ行くのは少なくともいやがっていましたよ(河路2004)」と釘本の戦場嫌いを語っている。釘本は中国の戦地から読売新聞の文芸欄に「子供と兵隊」という小品を書いた。これを西尾は「故国の知友に戦地の近況を報じようと考えたもの」と解釈している。「留守宅の奥さんがその切り抜きを持参され、わたしの留守中の家内に預けて行かれた。そのとき、年若い奥さんが『釘本が戦地で死ねば、わたしも生きてはけません』と言われたということであった(追)」と思い出している。中国の子どもとの交流については釘本は複数の短編に書いては発表し、これらが年少者向けの著作『一等兵と子どもたち』(1943)の原案となった。

中平解は1937年10月ごろの思い出として「九段の坂左手の兵営にいる彼を訪ねた。彼はからだを悪くして日本へ帰り、世田谷の大蔵病院に入院したあと除

隊になった（追）」と語る。中島敦も見舞いに来たという。釘本は「大蔵病院で養生したあと、伊豆の古奈温泉の旧本陣へ行って静養していた（追）。桜が満開の4月の初め、筆者の中平解は中井精一と二人で見舞いに行った。

このころの釘本について、次の金澤謹の証言は興味深い。「病を得て除隊になってからの釘本君には、以前のような線の細さはなくなり、逞しいものが出て来たように思われた。私は出征するということが、人の性格をこれ程変えるものとは思わなかった。繊細さを内に秘めながらも、行動は大胆に意欲的になり、強引ささえ出て来たようであった（12号）」というのである。

1939年には、長女しのぶが生まれ、釘本は二児の父となった。

5-6. 文部省入局から日本語普及まで（1939-1942／31-34歳）

1939年9月 文部省図書監修官

1940年5-7月 文部省より長沼直兄と上海、中支、北支、蒙疆へ日本語普及状況を視察に行く。9月 興亜院事務嘱託（42年9月解除）。

1941年3月 日本語教科用図書調査会幹事

1942年9月・11月 大東亜南方共栄圏派遣教育職員詮衡委員
12月 大東亜省事務嘱託・日本語教育振興会常任理事。

1939年9月に文部省に入った釘本は、1940年の初夏、長沼直兄とともに2か月余り中国の日本語普及状況の視察に行った。その時の思い出を長沼直兄は次のように述べている。「到る処で会議を開き、現地の教師たちと懇談を重ねた。極めて多忙な日々だった。が、中支では都合をつけて釘本さんは出征中転戦された蘇州杭州辺を案内してくれた。釘本さんは出征中かわいがっていた中国少年の行方を捜し、みつかったら日本へつれて帰って、学校に入れてやるんだと目を輝かして毎晩、私に話した。その少年は見つからなかったけれど、釘本さんの真剣さと熱心には心をうたれた（追）」。

この旅について天沼寧は、「現地語を研究し、現地人を理解することに力を入れている優れた日本語指導者の多くと知り合いになって帰られたのは、釘本君の功績であった。戦争の勝敗を越えた人と人、民族と民族とのつながりの種が播かれた（追）」と評価している。

西尾実によると日本語教育振興会の常任理事となった釘本はその機関誌である『日本語』編集の室に入り、特に南方向けの『日本語』編集には長沼直兄氏とともに力を入れられた（追）」という。『日本語』については、勝田守一は「（私は）当時の国策には消極的だったから、一切筆をとることをしない決意をしていた。釘本はそういう私に執筆の機会を与えようと骨を折ってくれた。そういう積極的な努力を好まぬ人には快く思われないうところもあった（追）」と述べている。釘本の思い込みの強さには抵抗を感じる人もいた。

5-7. 戦時中、日本語普及事業の時代（1943-1945／35-37歳）

1943年11月 文部省教学局 壮丁教育調査委員

同年12月 南方占領地日本語教育視察旅行（翌年春まで）

釘本はこの時期、「大東亜戦争と日本語」「思想戦と日本語教育」「宣伝戦と日本語普及」といった文章を書いたり、派遣教員養成講座で話したりして、戦時の日本語普及の旗振り役となった。木村宗男は1943年3月の「文部省南方派遣日本語教育要員養成所修了式」の写真に釘本と一緒に写っていることを紹介し、のちに「釘本先生が、日本語教育の歴史を語られるとき、この養成所のくだりにくると『ここにいる小出（詞子）さんも、木村君もこの養成所を出て』と、生き証人として引き合いに出された（12号）」という。同じく釘本の世話で1944年の春、セレバスに赴いた山口正は、出発前夜に釘本が自宅を訪ねてきて「最終の上り電車が来る頃にするこ腕をグッと飲み干して、私の手をにぎるなり『頑張ろうよ』と力強い一言を残して駅へ向かって走り出された。私は『この人のためなら死んでもよい』と思った（追）」という思い出を綴っている。

釘本は日本の戦況をどう認識していたのだろうか。白石大二是「サイパン島の日本軍全滅のニュースが伝えられたとき」に「文部省のあの北側の暗い一室で」釘本が「号泣」した姿が忘れられず、このことは「いつもわたくしに一種の感動を呼び起こさせる（追）」と記している。

この時期、釘本は3点の著書を刊行した。1943年12月『一等兵と子どもたち』（聖紀書房）、1944年3月『中世歌論の性格』（古今書院）、1944年9月『戦争と日本語』（龍文書局）である。武藤辰男は釘本の戦争中の著作『戦争と日本語』

について、「じっくりとその心を読んでみると、他民族へのヒューマニズムが見える（追）」と書いている。戦争関係の著作の間に、釘本が畢生の一冊として温め続けた国文学研究書がある。

5-8. 戦後の国語改革の時代（1945-1950／37-42歳）

- 1946年 3月 米国教育使節団に対応する。
- 4月 国語審議会幹事、新憲法作成に文部省より参画。
- 同年 5月 内閣官房総務課嘱託、大臣官房文書課兼務
- 1947年 4月 文部省教科書局国語課が独立、初代課長に就任。
- 1948年 12月 文部省所管の国立国語研究所が発足。
- 1949年 4月 明治大学講師 6月 文部省調査普及局調査課長
- 1950年 6月 第二次米国教育調査使節団連絡員

釘本は戦後の国語問題を扱う組織として、再編される国語審議会と文部省国語課、そして独立した国立国語研究所の三つが必要だと周囲にも折々話し、その実現のために奔走した。同僚の林大は、1946年の思い出を「釘本さんは文部省教科書局教材研究課の国語調査室長で〔…〕、室はのちに独立して国語課になり、釘本さんが初代の課長になられた。釘本さんにはお説教趣味があった。（追）」と述べる。関口隆克はこの時の釘本を「日本語をローマ字化しようとした人に対して、堂々たる立場から反論を加えた（12号）」と理解している。

安田（2010）によると、このころ、釘本はCIEのハルパンと繰り返し会談していた。ハルパンは日本語が達者であったが、GHQ関係の交渉には釘本の英語力も役立ったのではないかと思われる。草島時介は当時の釘本とアメリカ人との交流について興味深いエピソードを語っている。「〔戦後〕国語を簡易化させようとやってきた米人」に、ハーバード大学で英文学を専攻したスコット・ジョージがいて、釘本は彼を草島に紹介して「僕らで何かやらないか」と言った。そして、「釘本君が古典の原文をえらび、僕が英訳し、スコット・ジョージ氏が校閲」して日本の古典の英訳をシリーズで出す計画を立てたのだという。草島は3年間この仕事に没頭し、「訳了したものは、堤中納言物語、方丈記、徒然草、奥の細道、枕草子等八冊の古典であった」というのである。しかし、

約束の出版社が潰れて、出版は実現しなかった(追)。草島は、戦後文部省に入って「学校放送原稿の英訳、米軍との交渉」を担当したが、釘本は「米の文化使節がやってくるころには、後から後から原稿をもってきて『間に合わないは大変だ、僕の首に関係する』などとせきたてられたものだ。(追)」ということである。

天沼寧は、1947年、国語課長の釘本が課員に「最もよいと思うことを存分にやってみるがよい。それで具合の悪いことが起こったら課長が責任を負う。(追)」と述べたことを思い出している。それで、天沼が文書を、当時は前例のなかった横書きで作ったところ「釘本課長は叱るどころか、賛意を表した」という。天沼は、「現代かなづかい」「当用漢字表」等は、「ひとえに釘本さんの熱意・人力の結果が実を結んだものであるといえよう。(追)」と書いている。また、この頃の釘本の人柄については「課員に対する思いやり、世話好きも、なかなか味のあるもので、課員の恋愛から「幸福な幾組かの新家庭を築かせた」り、「若い課員が窮乏に耐えているのを見ると、宝物ともいうべき背広服を与えたり、内職の世話をしたり、ほんとに親身になって考えてくださった(追)」と述べている。戦時中、松村明は釘本家で釘本の勤める人と見合いをしたと語っている(河路2004)し、鈴木忍に見合いを勧めたのも釘本であった。

渡辺茂の記憶によると1948年の秋、「全日本国語教育協議会が結成され、その二日目の閉会まぎわに、国語課長の釘本さんが駆け付けてきて演壇に立ち『本日、さきほど、国立国語研究所設置議案が国会を通過しました』と喜色満面で報告された(追)」という。その年の12月に念願の国立国語研究所が発足した。

初代の所長、西尾実はこのいきさつを「君が文部省国語課長になってから、国語審議会および文化諸団体からの『国語研究機関を設置すべきである』という陳情を受け取って、現在の国立国語研究所を設置するときのこと、当時の釘本課長の熱意と活躍ぶりはまことにめざましいものであった(追)」と語る。西尾は「参議院に当時の文化委員長をしていた山本有三氏があって、省内の釘本君と呼応して万般順調に取り運んだために、第一国会で予算が通過し、昭和23年12月20日に国立国語研究所設置法案が公布された(追)」といい、1949年1月に所長の発令を受けた当初は「机一つ、紙一枚もない研究所が明治神宮絵

画館の一階を借り受け、次々と所員を任命して、最初の所員会議を開くまで、井出事務次官ならびに釘本国語課長の好意と親切は、深い感銘をもってわたしや所員に印象された（追）」と追憶している。

1949年に釘本は調査課長になった。伊藤良二は「釘本さんの調査課長在職中は、愉快であった。毎朝、一仕事をしてから2、30分遅れてきて、タオルで顔を拭いてマシンガンのごとくその日の重要事項を一気に発射する。『これは重要な内密なことだ』などおっしゃるが、その声が大きくてつつ抜けである。〔…〕課員の頭ごしに鳴りひびく天下国家論には、時に閉口したが、大局的には大いに啓蒙され調査活動に活気を与えられた（追）」という。

しかし、戦中戦後のいかなる時も、前向きに打ち込む釘本には戸惑う人もいた。追悼文の中では少数であるだけに、白石大次の次の文章は貴重である。「釘本さんは、どんな時にも、どんな環境にあっても、自分を積極的に生かし、時の前後、事情の変化にかかわりなくはいついていける人であった。いわば、矛盾がまたたくまに統一でき、どんな時代にもどんな事態のときでも、意識の分裂なく飛びこんでいける人であった。〔…〕わたくしは、機関を設けるためには何物も犠牲にするという考え方、機関ができさえすれば実際上の施策の学問的裏付けができるような考え方には賛成できなかった（12号）」というのである。

国語審議会については、1949年6月に国語審議会令が出され、土岐善麿が委員になり11月の第1回総会で会長に選出された。土岐は「(会長として)5期11年あまり、自分の信念にしたがって、能力の限りをつくしたつもりであるが、そのあいだ、時々釘本君からも慰労と激励のことばを聞かされた（追）」と述べている。釘本と土岐は親しく「ぼくは、教科用図書検定調査審議会会長、国立国語研究所評議員会会長になったが、〔…〕ぼくへの直接の参加交渉は、いずれも釘本君であった。そのため、進駐軍当局の意向や文部省の方針など、それぞれ克明に説き聞かされた記憶がある。役所のおぜんだてを整えて、そこへどうぞと誘い込む官僚的な手順と手際は、なかなか鮮やかなものであった。ユネスコの国内委員として、ぼくが若干の仕事をもとめたのも、釘本君の力に負うところが多い（追）」ということである。釘本は公私にわたって人付き合いがよく、友人が多かったが、そうした釘本の人脈は仕事に生かされた。

この時期、釘本は岩淵悦太郎、宮本敏行との共著『これからの国語：当用漢字現代かなづかいの研究』（1947、誠文堂新光社）、淡野安太郎、岩淵悦太郎との共著『現代の文章』（1949、学藝図書）のほか、単著で『国語教育論』（1949、河出書房）、『枕草子とその鑑賞』（1949、刀江書院）と精力的に出版活動も行っている。中でも異彩を放つ『枕草子とその鑑賞』は、初学者にも読みやすい伸びやかな鑑賞文が印象的である。激務の合間にこつこつと綴られたものだろう。

5-9. ユネスコ、教育関係の仕事の時代（1951-1962／43-54歳）

1951年2月	文部大臣秘書官（天野天祐文部大臣）
1951年12月	文部大臣官房渉外ユネスコ課長
1952年8月	ユネスコ国内委員会事務局次長
1953年5・6月	フランスほか6か国に出張、12月（財）言語文化研究所 理事
1955年2月	特殊法人日本育英会理事
1957-62年	（財）言語文化研究所附属東京日本語学校の校長、長沼直兄が 健康上の理由で休職する間、同校の校長事務取扱。

1951年2月に文部大臣秘書官になったことについて、犬丸秀雄は「大臣の側近者でも縁故者でもない彼が、国語課長から調査課長に転じたばかりのところだったのを秘書官に任用されたことは、彼が才気煥発の人物だったことを裏書きするものといえよう（追）」と述べる。この時の大臣は天野天祐で、中井精一は「秘書官となった釘本君の、天野さんへの打ちこみようは大変なものであった。彼が心から敬愛していた天野先生への奉仕は、私を感動させた。彼は『役人』ではなく『人間』として先生に仕えていた。天野先生への傾倒で見られる彼の『純情』は、官吏としての彼にとってマイナスになっていたのではないかと思う（追）」と書いている。同じ時期、カトリックの雙葉学園の教師であった友人の渡辺保は、釘本に「自分にも講義させろ」と言われた。「時事問題を担当してもらうことになったが、長続きしなかった。（追）」そうである。その後、釘本はユネスコへ、そして育英会へと職場を移す。

釘本は、初代ユネスコ国内委員会事務局次長になった1952年夏に、大阪書籍

の小学生用検定国語教科書の編纂に乗り出した。二瓶愛蔵はこのことについて「戦前国定教科書の編纂のため文部省入りした先生には戦後、民間教科書の検定制度が実施されると誘いがなかったが、文部省の要職にあっては応じられなかった」という事情を語っている。そして、「第1回の『小学国語』は8か月で全13冊を新編集するという無謀なものであったが、先生は仲間を率いて引き受けた。先生は会議の前に酒を出させ、饗蹙を買うこともあった。(昭和)28年2、3月は編集の最終作業で泊まりこみで夜も昼もない日が続いた。[…]戦後冷遇されていた古典教材(神話伝説から百人一首)を入れたのは当時としては大胆な試みで、以後国語教科書に古典が登場する端緒を開いた。先生は教科書ライターとしても数少ない文章家で、1年から6年まで多くの作品を書かれた(追)」と書いている。釘本らは1953年6月には『小学国語』全巻の見本を仕上げ、1954年の春に出版を実現した。共編著者は川端康成、高木市之助、濱田廣介、平林治徳であった。1956年には編著者に熊澤龍を加えて『小学校国語科学習指導計画試案』(大阪書籍)を出し、同年、『小学国語』改訂版の見本、1957年から59年にかけて改訂版の刊行と、教科書事業に打ち込んだ。田中保隆によると、「釘本さんの編纂した国語教科書は、質的には最もすぐれたものであったにもかかわらず、世俗はこれを受けいれようとはしなかった」。それでも、「釘本さんは挫折を知らなかった。釘本さんは徹頭徹尾の善意をもって、いろいろな土壤に種を蒔いてあるいた(追)」ということである。この時期の釘本はほかにも子ども向けの『良寛物語』(1954、同和春秋社)、『あの花この花』(1955、さえら書房)を出している。前者は、国文学者としての面目躍如というべき書きぶりである。後者は幼児のための詩集である。片桐顕智は「釘本さんは心の奥に清い流れを持っているのを感じさせる人で、詩を書かなくても詩人であった。『あの花、この花』はあまり感心しなかったが、今読むと悪くない(追)」と書いている。

中井精一は独特の視点から、釘本を「『人のよさ』『純真さ』をもっていたので、誤解もうけたであろうし、『出世』もできなかったであろう」といい、「初代のユネスコ国内委員会事務局次長から、日本育英会にうつった前後の彼の苦悩は、今でも私の印象に残っている。[…]育英会理事の任期が切れて、東京

外国語大学に移る時も、彼は悩んでいた」と書く。そして「育英会と外語大への転出には、彼の友人の友情があった（追）」と述べている。釘本は育英会では奨学金事業に力を入れた。関口隆克は、釘本が「非常な情熱を注ぎ、世界にも珍しい簡単で確実な方法を案出し見事な成果を上げた(12号)」と称えている。

昭和30年代に釘本は跡見短大（跡見学園女子大学短期大学部）で古典文学を講じた。国文学関係の著作としては福音館書店より『全釈堤中納言物語』（1956）、『全釈新古今和歌集（上）』（1958）を刊行した。ほかに編著で『現代に生きてゐる故事成語の辞典』（1951、東洋館出版社）、『漢字小辞典—よみ方・かき方・意味・使い方の手引』（共編著者：山口正、1954、港出版合作社）、『現代の手紙辞典』（1958）、『現代国語の用字用語辞典：かなづかい・漢字・送りがな・ローマ字などの使い方』（1961、福音館書店）、『現代の話し方事典』（1962、福音館書店）と実用的な本を矢継ぎ早に出している。跡見短大での仕事を伊藤嘉夫は「釘本さんは跡見短大に数年『花伝書』『新古今集』などを講じてくださった。そのうち跡見の大ファンになられ、学生をかわいがり、北海道の修学旅行にもついて行ってくださった（追）」と綴り、金沢加寿子は「先生はある時、（跡見短大の）校庭で体操をしている女子高校生たちに見とれて、思わず溜息と共に『美しい脚ですね』と言った。美しいものに感動し率直に言う。純真な人柄でないとできない。それができる人であった（追）」と綴っている。

さらに釘本は、自宅で古典塾のようなものを開いていたという。藤野靖はこのことを、「育英会理事をしていますが、国語の研究には熱心で、あるとき『婦人連に新古今の講釈をするから』と召集令がかかり、うちの女房も数回釘本邸の講筵に列したが授業料は無料、その上茶菓が出て、テキストは釘本さんご自身の謄写刷り、こんなマメさと親切さはちょっとまねできるものではない(追)」と振り返るのである。大山文子は「お宅で毎月一回の新古今のご講義にも伺わせていただき、如何に先生が後鳥羽院や定家に情熱をかたむけていらしたかをまざまざと思いだす。名調子のお話であった（追）」と書いて釘本をしのんでいる。プライベートの領域での釘本の顔である。

釘本が心酔していた文部大臣、天野天祐は後に獨協大学を作り初代学長になる。そのときのことを関口隆克は、「天野先生が獨協学園大学を始められると

いうことを聞かれた時に、(釘本は) そのお世話をしただけでなく、『天野教授会』というものを、一人で多くの先輩を駆けめぐって創られた。時には、こうしたあなたの氣勢にへきえきしたり、たじろいだりしたこともあった(12号)」と書いている。釘本は講師として獨協大学の教壇にも立った。

役職を離れても、その人との関係を大事にすることは、長沼直兄との関係にも言える。戦争中に日本語教育振興会で一緒に働いた長沼直兄は戦後、(財)言語文化研究所附属東京日本語学校を開校し自ら校長になっていたが、その長沼が体調不良で退職した5年ほどを、釘本が「校長事務取扱」となって校長がわりを務めた。こうして、日本語教育とのつながりを戦後も持ち続けた。

草島時介はこういう釘本について「釘本という男は、いつもキリスト教精神を地で行こうとする姿をもっていた。彼は人が困ることを知ると、何とかその突破口を作ろうと努力したものだ(追)」と述べている。

5-10. 東京外国語大学・ハワイ大学時代(1960-1965/52-57歳)

- 1960年4月 東京外国語大留学生課程設置に伴い、事務兼教授に着任。
(12月、併任解除) 9月、留学生課程補導主任。
- 1961年7月 「国語を愛する会」を設立。機関誌『日本語』刊行。
- 1962年6月 外国人のための日本語教育学会を創設、理事に就任。1964年
9月 ハワイ大学East-West Center招待教授。
- 1965年8月 文部省の委嘱を受け、アメリカ本土の諸大学の日本語教育の
実情を視察、10月 帰国。
- 10月 東京外国語大学評議員併任。(～1967年9月)

東京外国語大学は釘本の最後の職場である。留学生課程設置に伴い、その担当者として着任した。4月に事務官をかねて着任し、12月に併任解除で教授に落ち着いたが、この経緯について鈴木忍は「文部省の方から一方的に釘本さんを外語大に斡旋しようとしたので外語は怒ったわけです(74年テープ)」と言い、高橋一夫も「釘本さんは、事務官として採用されたんです。事務官なら教授会を通す必要がないからです(74年テープ)」と述べている。小川芳男が追悼文で、「国語・国文学に造詣が深く、しかも戦時中外国人に対する日本語教育を担当

された先生を、教授会の満場一致をもって、本学教授としてお迎えした（追）」と書いているのは事実ではない。東京外国語大学では釘本に目立った様子はない。それでも同僚の国松昭は「先生と話し合ったことはあまりない。発話量の差が決定的に大きいのである。わたしは、完全な聞き役にならざるをえなかった（12号）」と書いており、多弁ぶりは健在であったようである。

岩佐正は「特定の運動に加担することを好まない性格の君は国語課長を辞するとともに日本語に真の信頼と愛情と責任をもつ本来の業へと進んだ（追）」と表現している。官僚を離れ、私人として釘本が最後の情熱を注いだのが「国語を愛する会」である。戦争中の日本語教育振興会の機関誌と同じ『日本語』と名付けた機関誌の編集にも熱心であった。近所に住む医師の亀谷了とは親交を深めたが、亀谷は、釘本には「真実なるもの、美しいものに憧れ、時には感動のあまり自己を忘れてしまう様な所があった。それが僕の共感を呼んだのかもしれない。目黒に『日曜会』という交友団体があり、16年の歴史を持つ。釘本さんはその有力なメンバーで、僕も会員である。その会がユネスコ協会の設立にも一役買い、『国語を愛する会』ができると進んでその会員になった。すべて釘本さんを媒介として行われた（追）」と述べている。釘本の人脈にはこのような「公私混同」が見られる。釘本を公私合わせて理解しようとする所以である。

小原孝夫は1954年に目黒ユネスコ協会設立のとき、銀行支店長として知り合ったが、その小原も1961年の秋、「『国語を愛する会』に誘いを受け、入会して親しく話すようになった」という。そして、1962年には「私は頼まれて会の財政面を引き受けた。月々新刊の『日本語』を病床に届けるたび、嬉しそうに感謝の眼差しを向けてくれる（追）」と、巻き込まれている。

1962年の日本語教育学会の創設には、釘本の力は大きかった。鈴木忍は「日本語教育学会は釘本、高橋（一夫）、林（大）に私に加わって4人で飲みながら話したことがきっかけとなりました（74年テープ）」と語り、林大は文部省国語課の日本語教育懇談会以来、「日本語教育学会を創立しようとの、釘本さんを中心とする謀議に加わった（12号）」と述べる。釘本を中心にして日本語教育学会は創設されたのだった。会長に就任した鳥養利三郎は「何故に門外漢

たる私に会長就任を勧奨せられたのか、わけがわからなかったが、信頼している釘本君のいわれる事ならと文句を抜きにして引き受けた（12号）」と語り、釘本の采配であったことがわかる。

釘本は能を好み、能楽師の喜多長世と親しかった。喜多は釘本がよく「国語を愛する会」の仲間や留学生をも連れて能楽堂に能を見に来ていたことを語り、『『国語を愛する会』の談話会へ出て2時間ほど話をせよとのお話があり、応じた。先生の双眸には能に魅せられた青年の覇気が感じられた。先生の能への情熱は、『幽玄論』とともに、静かに息吹きはじめるだろう（12号）」と書いた。「幽玄」は、釘本の中世歌論の研究における眼目であった。

山田しのぶによると、この頃「父が育英会の理事をしていたときの秘書にキリスト教関係で孤児の世話をしている人がいて、その人が紹介した〈戦災孤児〉のKちゃん（談）」を、お手伝いとして家に住ませた。戦災のショックで口がきけなかったKちゃんに、釘本は優しく接したという。

やがて、釘本はハワイ大学に赴任する。東京外国語大学の学長であった小川芳男は、ハワイ大学のヤング教授に「ハワイ及び本土における日本語教育振興のために有能な教授を推薦してくれと依頼された。Scholar and administratorとして釘本氏を推薦した（12号）」と書いている。

ハワイ大学時代の釘本は、妻と娘を呼び寄せて、楽しい日々を過ごしたようである。妻、文代は「ハワイでは夕日のすばらしさを毎夕一緒に堪能した（追）」と書いている。長女のしのぶによると、車の運転はしのぶの仕事だったそうである。夜明け前から起きだして日の出を見に行くこともあった。

齊藤修一は「ハワイ大学夏期講座の教員会議で、ヤング教授が説明をはじめたとき、入ってきた釘本先生はサングラスに赤と黒のアロハシャツ、半ズボンという若やいだいでたちであった。1か月半ばかりたって『ジャパン・ナイト』なる催し物があった。このときは、キモノにはかま・白たびという伝統日本の粹といったなりで会場に臨まれた（12号）」と回想している。中井精一は「このハワイ行きは、彼の国際的精神にもよるものだろうが、文部省を離れて以来、彼の心に鬱積していた『やるせなさ』、もっていきようのない懊悩の、最後の『はげぐち』でもあったと思えてならない（追）」との見方を示している。

齊藤修一は、「ハワイ大学ではハワイの中高の日本語の教師の研修を担当した。ほとんどが日系人だった。釘本さんは中島敦の紹介をしたと言っていた。ハワイでの釘本さんはとても楽しそうだった(談)」と話した。

教わった堀井れい子は「私達に一生懸命日本語を教えるとともに、日本の文化を紹介してくださった。お能の先生達に特別にお話をしていただき、修学院や東大寺のフィルムを見る機会を与えてくださった(12号)」と書いている。

窪田富男によるとハワイの釘本からの手紙は、「日本語教育についての日米協力の必要性が強調され、調査・研究・編集・教育等の具体策が述べられ、何よりも日本側の受け入れ体制完備が緊急であることをる説かれていた。日米を土台に、しだいに各国との協力に発展させたいというものであった(12号)」と、晩年の釘本の日本語教育振興への夢を伝えている。

帰国直後のこととして、伊吹一は『『国語を愛する会創立五周年記念公開講演会』を昭和40年10月30日に国学院大学の大讲堂で行い、先生には『ハワイの日本語』と題しての講演をお願いした。『国語を愛する会』の創立、『日本語』の発刊、月例研究会など運営のすべての中心が先生であった。目を閉じると目黒の協和銀行支店での古典教室で『新古今集』を講じられた柔和なお顔が浮かんでくる(追)」との思い出を綴っている。

5-11. 闘病時代 (1965-1968/57-60歳)

1965年12月	結核腫、発病、保生園・東大附属病院にて療養
1966年9月	責任編集『につぼんごのほん』1年上(ハワイ教育会)刊行
1967年9月	日本語教育学会 副会長
1968年5月11日	早朝東大付属病院にて死去。正四位、勲三等瑞宝章。

帰国後間もない1965年12月から、釘本は入院生活を余儀なくされた。晩年を診た医師、戸川潔も釘本の古い友人であった。戸川は「戦後私が大学の医局で勉強を始めたころ(釘本と)知り合った。祐天寺のお宅へ時に弟とともに押しかけ、泊めてもらったこともある。[...] ハワイにおられたころ、訪ねたこともある。帰国後肺に影を発見、保生園で久留先生、森本先生に治療してもらうことになった。再発後は東大病院をお願いした。病気を克服しようと懸命の努

力をする精神力は立派であった（追）」と回想している。

『全訳新古今和歌集』は1958年に上巻が出たきりだったが、伊藤嘉夫は「『全訳新古今和歌集』の下巻は、すでに成稿し、出版されるばかりになったものが遺稿になってしまった。新古今和歌集は釘本さんがもっとも愛した古典で、力の入れようも並々ではない（追）」と述べている。残念ながら、下巻は現在に至るまで出版されていないようである。

晩年の釘本は声を失い、筆談で会話をした。窪田富男は、「先生には『日本語教育センター』設立の夢があった。病床でもこの主張はたえず繰り返された。管をくわえつばを吸い取らせつつ一気に30枚ものメモをしたためた。『外国人に対して日本語研究の信頼すべきセンターを、日本人に対してはみずからを正しく、世界的姿相において認識できるためのセンターを用意せねばならぬ。』〔…〕鬼気迫るものを感じさせた（12号）」という。関口春子には「メモを一枚ずつはがしては、次のことを書いた。『気が弱くなってカミサマと話した。少しでもラクにしていただけませんか、私ばかりでなく私を心配してくれる人々も助かりますから』カミサマは返事をしない。ゲッセマネの園でキリストが同じようなお願いをしたのを思い出した。『コレハイケネエ』と思って、カミサマとの話はやめた（追）」と話したそうである。中村一良は「釘本の愛唱讃美歌は217第3節と聞く。その歌詞は『あまつ真清水受けずして、罪に枯れたるひと草の、さかえの花はいかで咲くべき、注げ命の真清水を』（追）」であったという。

釘本の最後の仕事は、ハワイで約束したハワイ教育会の小学生用の教科書『にっぽんごのほん（日本語の本）』の1年生から6年生までの全巻を責任編集するというものであった。戦争中の日本語教育振興会の教科書と同じく、それぞれに別冊の教師用の手引書がつく。1966年9月に「1ねん上」が出て、1967年2月に「1ねん下」、同年9月に「2ねん上」が出た。1968年5月に釘本は亡くなるが、その後、1968年10月の「2ねん下」、前後して同年9月の「3ねん上」、1969年2月の「3ねん下」までが釘本の責任編集による。このことについては鈴木忍が次のように書いている。「釘本教授が病床において書かれたという『にっぽんごのほん』を最近拝見した。〔…〕あれからずっと闘病生活

に入っていたのに4巻が出版され、非常に詳細に解説された教科用書まで完成されているのには、びっくりした。あのうす暗い病室でこつこつ執筆を続けておられたとは今まで考えてもみなかった。教授の不撓不屈の精神には頭がさがる（追）。

「4年上」からあとは、阿刀田稔子が責任編集者を引き継ぎ、最後の「6年下」までの発行を果たした。同じ時期の編著に『話し方の事典』（1967、光風社書店）、『手紙の書き方事典』（1968、光風社書店）がある。

4月28日の乱れた字による「崩壊せんとする自己の先に一瞬生きよとの観念（イデー）の我を貫ぬけり」という自由律短歌のような書付が釘本の絶筆である。釘本はもっと生きたかった。中井精一は「前橋で少年時代を過ごした彼が、大学病院で、その郷里の名を繰返し書きしめたのは、そのころを回想しながら、半世紀の生涯を夢のように思い浮かべたのにちがいない（追）」と語っている。山田しのぶによると、釘本の墓は、前橋の長昌寺の一面、上毛孤児院のすぐそばにあり、墓石にはクリスチャンの印の十字架がついているのだという。キリスト教徒の多い前橋の寺ならではのからいなのだということである。

その死に臨んで妻の文代は、心残りは「人間の行為にしても美しいもののにのみ目を向ける主人に、何もかも忘れて、思い切り自然の美しさにひたりきる時を持たせられなかったこと」「常にみすぎ、よすぎの仕事と頼まれごとに追われ通して、自分の本当のものがほとんど書けなかったこと」「病気中考えていた『俊成、定家』の論文を書かせられなかったこと」だと痛切な思いを綴っている。妻の目には文部官僚としての仕事は「みすぎ、よすぎの仕事」で、釘本の「本当のもの」は中世歌論研究であった。このことは友人たちにも共有されていたようで「国語を愛する会」は、釘本の死の翌年4月に、1944年以降の論文を加えた『増補 中世歌論の性格』を追悼の思いを込めて出版した。

6. 釘本久春のライフストーリーから読み取れること

他者の記憶から人生を辿ってみると、公的な記録や文章からは読み取りにくい釘本の人間像が浮かんでくる。一貫して見られる特徴を順不同に挙げる。

(1) キリスト教への信心

- (2) 英語への親しみ
- (3) 家族や周囲の人々への思いやり
- (4) 世話好き・説教好き
- (5) 子ども向けの教育的書き物への思い入れ
- (6) 恵まれない子どもへの温情
- (7) 中世和歌を中心とする古典文学研究への志
- (8) 日本語を多くの人と分かち合おうとする情熱

これらの特性を持つ釘本久春は、戦中戦後の文部省で官僚としてそれぞれの時期の政策に忠実に、人を説得し人を動かして計画を実行していった。こうしてみると釘本が戦前戦後を通して「愛」ということばを好んで使うのにはキリスト教の影響が考えられるし、釘本の「矛盾統一」の鍵は、一貫した日本文学への敬愛と信頼からくる日本語への愛着、またそれを広く知らしめて、多くの人と分かち合いたいと願う気持ちに支えられていたことが理解できる。

7. これからの課題

本稿では、他者の記憶から釘本のライフストーリーを描き出した。戦争中、そして占領期という制約の多い時代において、文部官僚としての役割を負っていれば、その言動は自由ではあり得ない。自らの日本語への信頼と愛着を原動力に、無理を乗り越える釘本の情熱は周囲の人々を動かした。

これを理解した上で、文部官僚としての釘本の仕事を丁寧に辿ることは今後の課題である。国家的な仕事ながら、釘本以外になし得ない展開もあって、釘本の個性や志が日本のことばの歴史を動かした可能性もある。それらを解明していかなければならない。官僚というにはあまりにも人間的な印象を周囲に強く残した釘本が、日本語普及や国語改革を中心になって推進したことの意味を考えるのも今後の課題である。釘本が生涯追求した中世歌論の議論や「幽玄」への思い入れと、国語政策の仕事とはどう関係するのだろうか。釘本の日本語教育への情熱の正体は何だろうか。戦中戦後を通して、釘本が目指したものは何だったのだろうか。

それから、釘本は中島敦の作品の価値を高く評価し、世に知らしめた人物と

しても知られるが、釘本はなぜこのことにこれほど熱心だったのであろうか。釘本はなぜ子ども向けの教材を熱心に書き、子どもたちに何を伝えようとしたのだろうか。晩年を打ち込んだハワイの子ども用教科書編纂について考えるのも今後の課題である。

謝辞

本稿は、2018年3月24日に開催された科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査 (研究代表者: 斎藤達哉)」第2回研究会「教科書編纂と言語政策」において行った「釘本久春研究の新たな視点」と題する口頭発表に基づき、当日いただいた意見等を踏まえて、まとめたものである。当日、有意義なコメントをいただきました斎藤達哉氏、鈴木泰氏、川上尚恵氏、田中寛氏をはじめ参加者のみなさまに感謝申し上げます。また、インタビューに応じてくださった山田しのぶ氏、齊藤修一氏に心より御礼申し上げます。

注

- (1) 山田しのぶ氏インタビューは、2017年10月8日に斎藤達哉氏、鈴木泰氏と河路の3人で実施した。

参考文献

- 河路由佳 (2004) 『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生—戦時体制下の国際学友会における日本語学校の展開—』 港の人。
- 河路由佳 (2009A) 「戦時中の鈴木忍・高橋一夫と日本語教育—1974年の座談会録音テープより (1)—」 『東京外国語大学論集78』 pp.303-316.
- 河路由佳 (2009B) 「戦後 (1945-1974年) の高橋一夫・鈴木忍と日本語教育—1974年の座談会録音テープより (2)—」 『東京外国語大学論集79』 pp.415-434.
- 河路由佳編 (2009C) 「財団法人言語文化研究所附属東京日本語学校年表」 『財団法人言語文化研究所附属東京日本語学校開校60周年記念誌』 pp.111-133.

- 河路由佳 (2009D) 「鈴木忍とタイー戦時下のバンコク日本語学校での仕事を中心に一」『アジアにおける日本語教育一』タイ・チュラロンコン大学、pp.3-27.
- 釘本久春 (1963) 「日本語教師と外国人生徒」『日本語教育』2号、pp.62-66.
- 駒井裕子 (2000) 「『日本語』誌上における釘本久春の「言語精神論」と「言語道具論」」『日本語・日本文化研究』7号、pp.67-73.
- 桜井 隆 (1992) 「日本語教育史上の中島敦—またはイデオログとしての釘本久春」『獨協大学教養諸学研究』27 (1), pp.50-63.
- 嶋津 拓 (2017) 「中島敦の『山月記』と釘本久春—はたして釘本は「袁儻」だったのか—」『埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2: 仁科弘之教授退職記念論文集』pp.416-428.
- 島内景二 (2009) 『中島敦「山月記伝説」の真実』(文春新書)
- 安田敏朗 (2010) 「国立国語研究所設置をめぐる二、三のことども」『国文論叢』43, pp.17-34.
- 山口 正 (1986) 「釘本久春氏の業績 (日本語教育史<特集>)」『日本語教育』60号, pp.95-104.